

国際シンポジウム(ベルリン)報告

政治とカネ：ラテンアメリカ 8カ国の実態調査にもとづく討議

石井 陽一

1. はじめに

昨年7月11日から13日までの3日間、ベルリンのイベロアメリカ研究所(Ibero-amerikanisches Institut)において、私共の本部であり、汚職・腐敗防止のシステムを構築する国際NGO トランスペアレンシー・インターナショナル(Transparency International: 略称TI、在ベルリン)とカーターセンター(在アトランタ)との共催、米州開発銀行欧州事務所、米国国際開発庁(USAID)、社会科学研究所(WZB、地元ベルリン)の後援により、政治とカネをテーマとする国際シンポジウムが開催され、私もTI ジャパンを代表して出席した。Crisis(ラテン語で「光線」)を名乗るこの企画は、アルゼンチン、パラグアイ、ペルー、コロンビアの南米4カ国、パナマ、コスタリカ、ニカラグア、グアテマラの中米4カ国、計8カ国それぞれの三大政党を対象にTIとカーターセンターが行った実態調査を使って、政治とカネの関係を明るみに出そうとする試みである。このプロジェクトは、TIアルゼンチン(「市民の力」Poder Ciudadanoと名乗っている)の代表であり、女性弁護士であるデリア・フェレルさんの発案によるものである。会場にドイツ国営のイベロアメリカ研究所が使われたのは、今回の討議がこれら8カ国を対象とするためであろう。ラテンアメリカ



ドイツ国立イベロアメリカ研究所
(画面には入らなかったが、向かって左手にサン・マルティン、右手にシモン・ボリーバルの銅像がある)

関係のあらゆる分野にわたってドイツ内外の蔵書を豊富に擁する図書館、数百人入れる大ホール、百人程度を対象とする小ホール、レセプション会場などを備えた研究所であり、ドイツにおけるラテンアメリカ地域研究の比重の高さを象徴するものと受け取れた。それに引き換え、わが国では、ラ米文献専門の図書室は、上智大学のイベロアメリカ研究所に依存していることを思うと、日本における一人のラ米研究者として、とかくラ米を外野視している日本との大きな格差を感じさせられた。

このプロジェクトの理念は：

(1) 有権者は議員の選挙資金調達源を知ることにより、支持する候補者の選択の判断がやりやすくなり、当選後の代表の行動にも監

視の目を光らせるができるようになる。

(2) たとえば、公害を垂れ流しているような企業から献金を受けている候補者に投票しない、また当選後公共調達の上で特定企業が議員から便宜を受けていないかどうかの判断もつけやすい。

(3) 有権者は、政党及び候補者の資金源を追及すべきである。そうすることで、自分たちの利益がきちんと代表されているどうかの判断がつく。

(4) 有権者は、候補者及び政党の透明性を要求し、情報公開に応じないような候補者および政党は選挙の投票時に罰することができる。

(5) 腐敗のリスクはとかく政治資金と結びつき易い、などである。

2. 調査の項目と方法

8 カ国対象の調査項目は、(1) 政党会計、(2) 選挙管理委員会への報告、(3) 市民社会への情報公開度、(4) 報告の包括度、(5)

報告の緻密度、(6) 報告の信頼性、(7) 予防措置、(8) 制裁、(9) 国の監視、(10) 市民の監視、の 10 項目に及ぶ。どこの国にも、精粗の差はあるが、公職選挙法、政治資金規正法、政党助成法に類する法はあることはあり、この 10 項目について法と実施に分けて採点するようになっている。例えば、法は政党の会計責任者の資格を求めているか、内部監査はあるか、資金収支報告は年次か四半期別か月次か、情報公開の義務はあるか、献金者の個人名や献金の日付けは明記するようになっているか、議員の資産公開の義務はあるか、実施上はどうなっているか、などについて、地元の調査チームが関連法規を分析、実施上の評価は会計士、政党の会計・監査などの実務責任者、選挙管理委員会の委員や事務官などに 40 の質問を出すことで行われ、法律上の義務(L)と実施状況(P)の二欄に分けて採点し、その結果を「不十分」(△)、「概ね良好」(○)、「十分」(◎)としてそれぞれの欄に記入し、一覧表にしている。

		AV	ARG	PAR	Peru	COL	PAN	CR	NIC	GUA
政党会計	L	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△
	P	○	○	○	○	○	○	○	○	○
選挙管理委員会への報告	L	○	○	△	○	○	◎	○	△	△
	P	◎	△	◎	◎	◎	◎	◎	○	△
市民社会への情報公開度	L	△	◎	△	△	○	○	△	△	△
	P	△	○	△	○	○	△	○	△	△
報告の包括度	L	○	◎	◎	◎	◎	△	◎	○	△
報告の緻密度	L	○	◎	○	◎	◎	○	○	○	△
報告の信頼性	P	○	○	○	○	○	○	○	○	○
予防	L	○	◎	△	○	○	◎	○	○	○
制裁	L	○	○	△	○	◎	△	○	◎	△
	P	○	◎	○	△	◎	○	△	△	△
国の監視	P	○	◎	○	○	◎	◎	◎	○	◎
市民の監視	P	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	○

出所：Transparency International. "The crisis project: money in politics, everyone's concern" <http://www.transparency.org>

注：AV=8 カ国平均；ARG=アルゼンチン；PAR=パラグアイ；COL=コロンビア；PAN=パナマ；CR=コスタリカ；NIC=ニカラグア；GUA=グアテマラ

傾向として、公的な政党交付金の収支報告は公開度が高いが、私的な献金の公開度は不透明であることが共通している。また献金者の個人名を明示するか匿名でよいかは、ラテンアメリカの場合、麻薬マフィアの献金が紛れ込む可能性があるだけに重要な意味を持つ。

3. 初日のワークショップで

初日のワークショップでは、司会者が、「政治資金を原因とする腐敗のリスク」という言葉を示して、これから連想されることを紙に書き出して貰い、それに基づいて討議したいと言う要請があった。「デモクラシーの墮落」、「競争をゆがめる」、「不法な資金源がマネーロンダリングのような不法な活動を助長」、「政党が少数のエリートや企業の利益代表になり、大衆の利益を無視」、「影の献金者の存在」、「政策決定に不当な影響」、「国家の収奪」、「代表しない政府」、「貧困と低開発」、「選挙運動過程の腐敗」、などの言葉が次々とボードに並べられた。政治とカネの問題は洋の東西を問わず、通底しているものがあることを実感した。

各国の経験の交換という場があり、日本について聞かれたので、私は、「まずは、最近、07年5月28日に松岡利勝農相が議員宿舎で自殺したことから始めたい。その原因は、同議員の政治資金管理団体が賃借料、水光熱費無料の議員会館に事務所を置いているのに、巨額の水光熱費を計上していたのは、選挙民の葬式での香典、結婚式、開所、開店のお祝い金など領収書を取れない支出をすり替えたものと推定されるが、最大野党の民主党から厳しく追求され、違法ではないとして説明

を拒んでいたが、抗しきれず自殺に追い込まれた。献金の受け皿として政治家個人を支部長とする政党支部、政治資金運営団体、政治団体が設立されており、その間の資金の振替など一種のマネーロンダリングが行われている。団体は政治資金収支報告書を総務省または選挙管理委員会に毎年提出するが、経常経費については領収書の添付を要求されていない。同議員の自殺を契機として、政治資金規正法の改正が浮上し、自民党案は政治資金運営団体に限り5万円以上は領収書添付、民主党は1万円以上添付と対立したが、国会の多数を制する自民党案が可決された」と報告した。

TI 韓国の代表から、韓国では、選挙で選ばれる公務員（議員、知事、市長など）は、親戚を除き、香典やお祝いを渡すことを法律上禁止されていると言う発言があった。確かに被選挙公務員は政見で戦うものであり、香典やお祝いは一種の賄賂なので、禁止は当然である。罰則はどうなっているのかと質問してみると、渡した香典やお祝い金の50倍が罰金として課されるとのことであった。わが国でも75年に自治省（当時）が示した指針の中には同趣旨の規定があるが、その存在すら知らない議員が多いので、罰則付きの法律に格上げする必要があるだろう。公職選挙法上も、秘書など本人以外の者が香典あるいはお祝い金を渡せば処罰されるが、議員本人が渡す分には処罰されない（公職選挙法199条の二、249条の二③一と二）。

もちろん、これも法律で決められれば、その通り実施されると言うものではない。韓国も香典、祝い金で法的には固いようではある

が、そのとおり実施されているか、全体的には透明度の高い国ではないので気になる。法律は立派だが、その通り実施されているかどうか、法と実施のギャップの有無、ギャップの程度はラ米8カ国のみならず、全世界規模で調査を要するところであろう。

例えば、わが国の政治資金規正法では、個人による同一政治家に対する献金は年間150万円まで(22条2項)、個人の政党、政治団体に対する献金は年間2千万円までであり(21条1項3号)、それ以上の献金をした者、受けた者は1年以下の禁固又は50万円以下の罰金に処することになっているが(第26条)、この罰則が適用されたと言う話は寡聞にして知らない、という場合もある。

4. 基調講演より

2日目の基調講演の中で、社会科学研究所(WZB)のウォルフガング・メルケル主任研究員が、「社会におけるデモクラシーを保証する手段として垂直型の説明責任が最良の手段とはいえない、最も腐敗したペルーの元大統領(アラン・ガルシアと名指しはしなかったが)が現大統領に復帰したことからみて、多くの国で腐敗したリーダーに選挙民が無関心なところが依然としてあるから、司法や会計検査院などによる水平的な説明責任がなされることこそ必要である」、という趣旨を述べたことが印象に残った。同氏は、政党を計画型政党(政見実施型)、カリスマ型政党(独裁型)、クライアント型政党(公益より特定利益優先型)に三分類し、ラ米の政党はこの三分類の特徴を兼備しているが、あえて言えば、チリ、ウルグアイ、コスタリカが

第一分類、チャベス大統領のベネズエラ、モラレス大統領のボリビアが第二分類、メキシコ、アルゼンチンが第三分類の色合いが強いと結んだ。

5. 舞い込んだフジモリ問題

初日にチリの最高裁が、ペルーのフジモリ元大統領引渡しを拒否する第一審の判決を下したという情報が入ったところ、TIペルーの代表がいきり立ち、TI全体としてチリ最高裁への抗議声明を出すよう要求したので、TIジャパンの意見を求められた。従来からTIペルーはトレド派に近いと見ていたが、私はアラン・ガルシアの腐敗とのバランスをどうとるのか、チリ最高裁によるアルゼンチンのメネムの引渡し拒否に対してはなんら抗議声明を出さなかったではないか、という整合性の欠如を指摘し、抗議声明を控えることを求めた。しかし、大勢はTIペルー支持で、その日のうちにチリ最高裁への抗議声明を出すことになった。それがチリ最高裁のペルー引渡しを肯定することになった第二審の判決に何らかの影響を与えたかもしれない。従来から、ヨーロッパにおけるフジモリ人気は甚だ悪く、会議のたびに困ることがある。ひとつには、10年ペルーを治めた人がいまさら日本人を名乗るとは何だという反感もあるようだ。

6. 結びに代えて

このシンポジウムを総括するならば、政治資金(選挙資金と政党資金)がもたらす腐敗の可能性、それに取り組む法律と制度、政治資金の透明性を求める市民社会の役割につ

いて、参加国の経験や対策を比較し、問題解決の糸口を見出す試みであったといえる。ただ、主催側が旅費をもつという条件であるにもかかわらず、先進国からの参加者が少なかったのは残念であった。わが国でも、とかく比較の対象といえば、「英国では」「フランスでは」「米国では」というように先進国の事例を引き合いに出すのが常だが、それは日本ばかりではないようだ。ラ米8カ国をモデルにしているところに、吸引力が足りなかった

のではないかと思われた。アルゼンチンのデリア・フェレルさんの発案がグローバルに生かされなかったのは残念だが、TIは、次なるステップとして、この法と実施の対照による政治とカネの実体究明の調査方式をグローバルに実施することを考えているようである。

(いしい・よういち NPO法人トランスペアレンシー・ジャパン事務局長、神奈川大学名誉教授)

ラテンアメリカ参考図書案内③

『コーヒーハンター—幻のブルボン・ポワントゥ復活』

川島良彰 (Jose Yoshiaki Kawashima) 平凡社 253頁 2008年2月 1,700円＋税

本著は、日本を代表するコーヒー・スペシャリスト、川島良彰氏の半生記である。著者は、1975年に18歳で内戦前のエルサルバドル国立コーヒー研究所に留学し、コーヒー農事技師の道を歩み始めた。そんな青年時代からの探求の夢であった、レユニオン島の伝説のコーヒー品種「ブルボン・ポワントゥ」を発見、昨年島の人々と65年ぶりに復活させたことで有名だ。

内戦前の平和で美しかったエルサルバドル、イデオロギーと現実のギャップ、そして内戦の勃発。その後、ジャマイカ、ハワイ・コナ島、スマトラでUCCのコーヒー農園開発を指導した。世界中のコーヒー農園を訪れてコーヒー市場価格の変動が生産者の暮らしや森林破壊に大きく影響することを体験した著者は、本著の最後で「サステナブル・コーヒー(持続性可能なコーヒー)」の流通拡大の重要性を訴えている。

2006年、私が著者とコンサベーション・インターナショナル(www.conservation.or.jp)がパナマで実施する環境に配慮したコーヒー生産の事業地を訪問した際、著者は先代から受け継いだコーヒー農園を細々と守り続ける小規模農家に着目した。70年以上もパナマの山奥で生産され、現地消費されていたこのコーヒーは、著者の様々な努力と技術支援により、最高級品として認められ、2007年に初めて海を越えて日本に輸入された。この事実は、周辺地域の農家にコーヒー生産と自然保護の両立の重要性を再認識させ、我々の活動への参加農園が増加している。

著者は今後も世界中で新たなコーヒー・ストーリーを生み出し、消費国である我々日本人の役割を問い続けるであろう。本書はその原点に過ぎず、続編が期待される。 [山下加夏]